

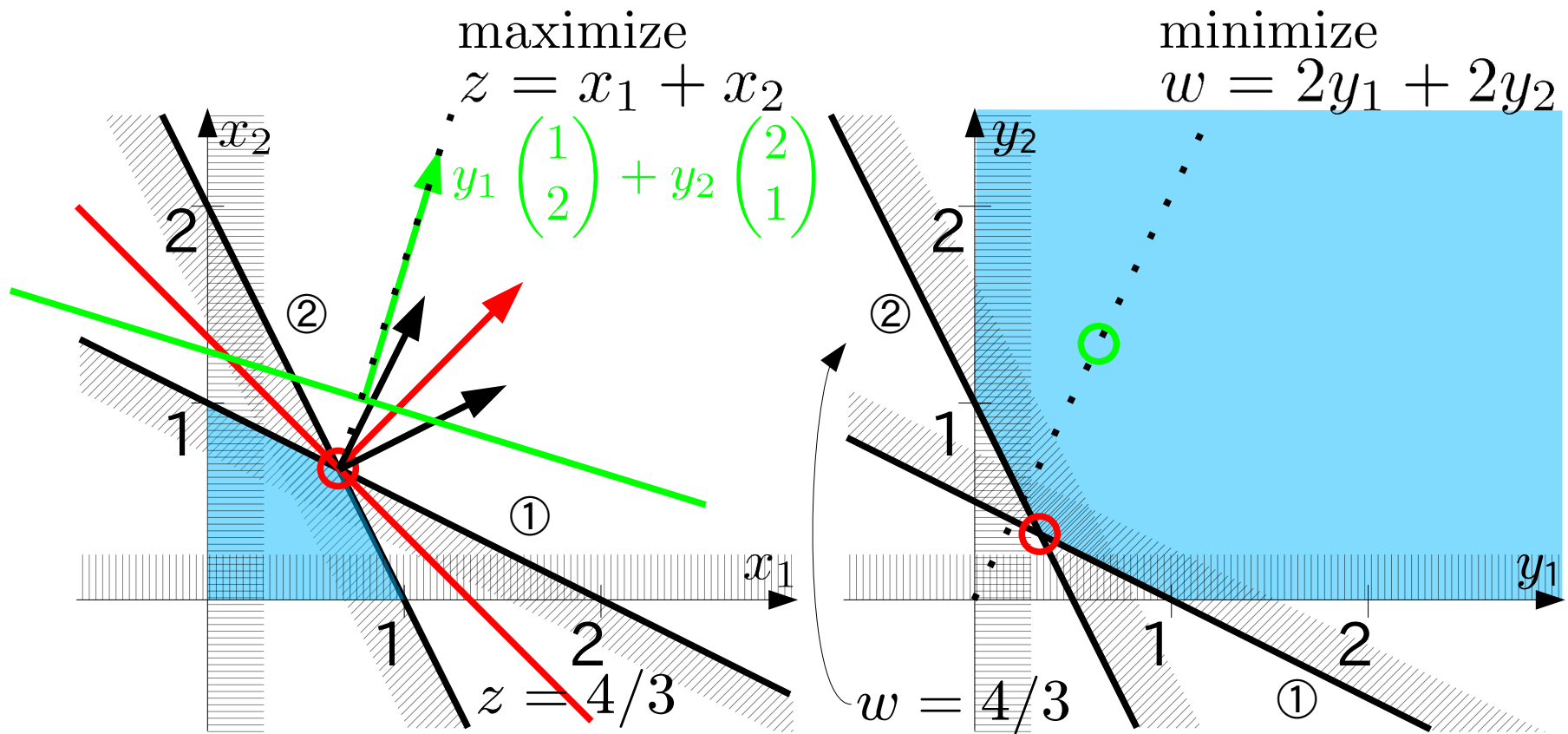
数理計画法

第11回:内点法1

双対変数値と支持(超)平面

法線ベクトルの組合せで目的関数値に対する制限が決まる

⇒一番厳しい制限=目的関数と同一法線



復習+α:線形計画問題と多面体

多面体:

線形計画問題を考えるベクトル空間において、制約等式、不等式の定める領域、全ての制約を満たす多面体=実行可能領域

(超)平面:

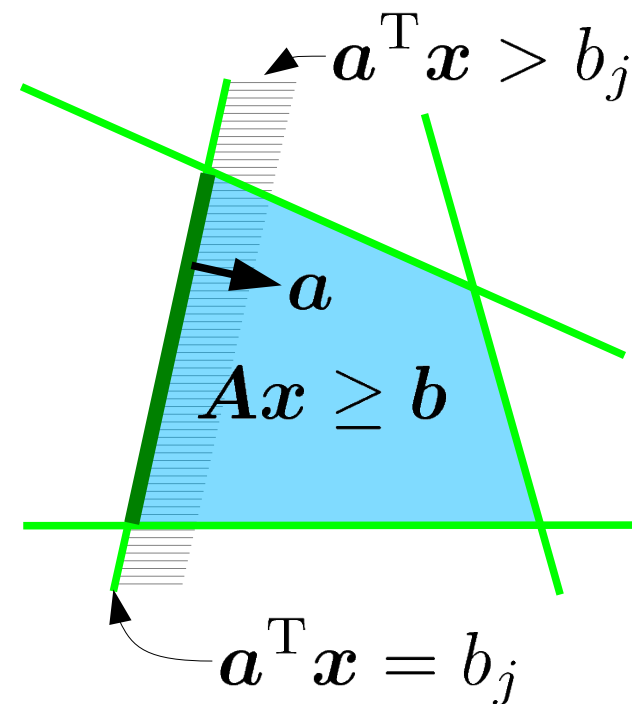
(線形)制約等式を満たす点の集合

支持超平面:

多面体を構成する不等式の一つが単独で構成する多面体の境界

面:

多面体とその支持超平面の交わり



$$A = \begin{pmatrix} \vdots \\ a^T \\ \vdots \end{pmatrix}, b = \begin{pmatrix} \vdots \\ b_j \\ \vdots \end{pmatrix}$$

復習+α:線形計画問題と多面体

交点:
複数の(超)平面の交わりのうち、点を成すもの

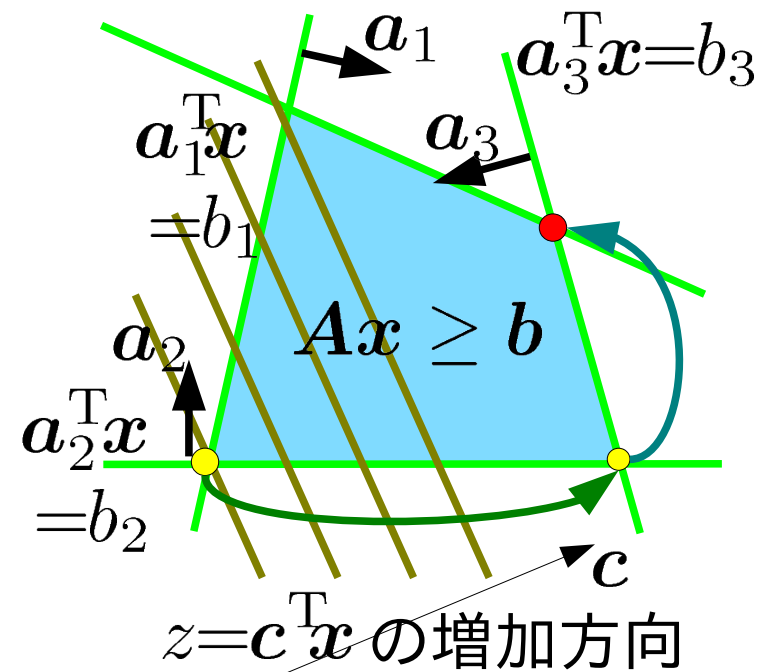
多面体の頂点:
支持(超)平面の成す交点

単体法の原理:
目的関数が増加するように多面体の頂点を移動し、最適解を求める方法

出発点となる頂点から頂点を構成する支持超平面を順番に入れ換えて目的関数を増加させる

総当たり法よりも効率が良い?

$$A = \begin{pmatrix} a_1^T \\ a_2^T \\ a_3^T \\ \vdots \end{pmatrix}, b = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \\ \vdots \end{pmatrix}$$

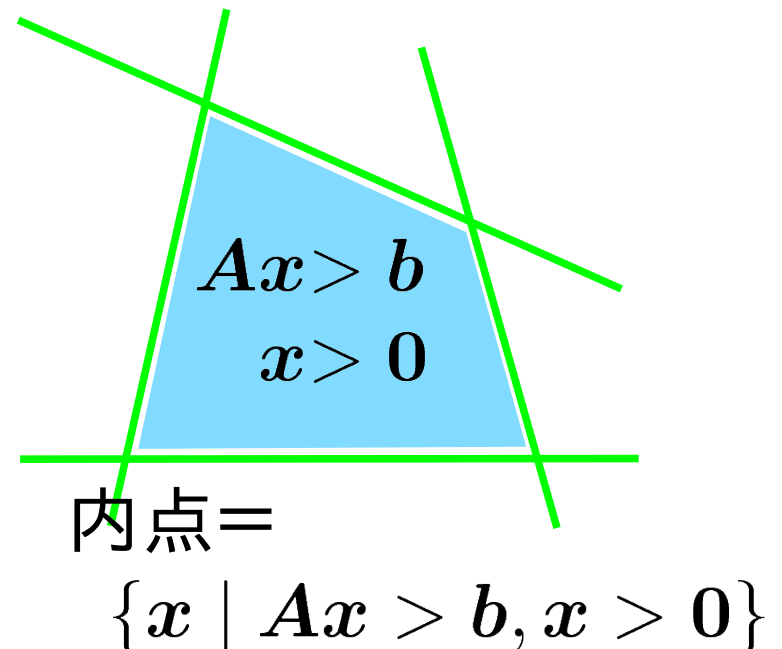
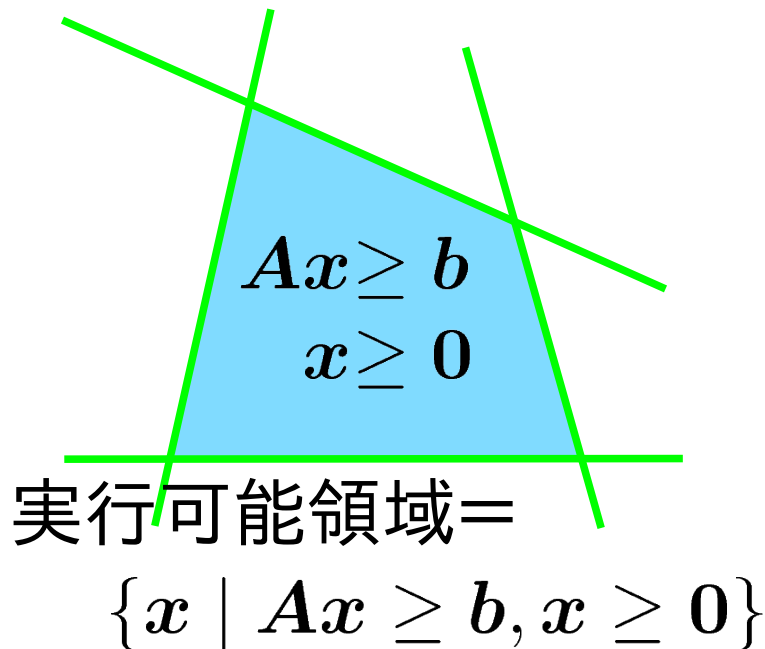


内点法の原理

内点:
不等式標準形の制約式から等号を除いた条件を満たす点を内点と呼ぶ

不等式標準形

$$\begin{aligned} & \text{minimize} \\ & z = c^T x \\ & \text{subject to} \\ & Ax \geq b \\ & x \geq 0 \end{aligned}$$



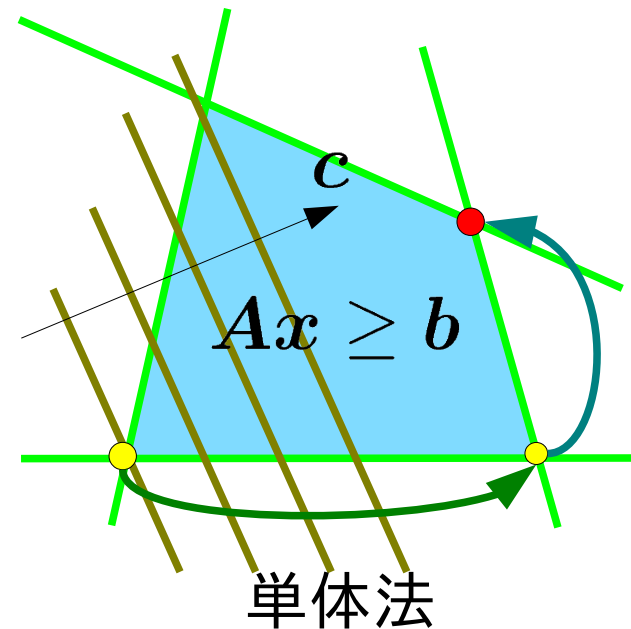
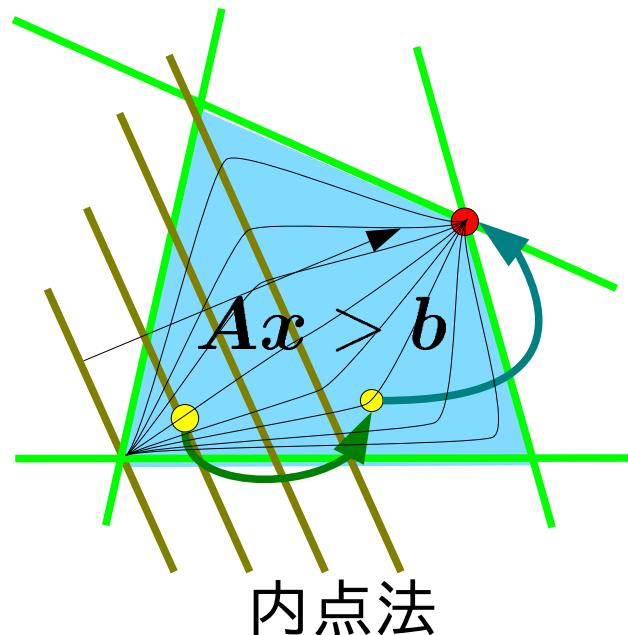
内点法の原理

内点法の原理:

内点領域中に最適解へ向かうベクトル場からなる軌跡を作り、軌跡に沿って内点領域を通る経路を近似的に求める方法。

不等式標準形

$$\begin{aligned} & \text{minimize} \\ & z = c^T x \\ & \text{subject to} \\ & Ax \geq b \\ & x \geq 0 \end{aligned}$$



内点法の原理

内点法の原理:

ある目的関数値をとる内点

x_k (ただし $Ax_k > b$)

を目的関数値を改善するように更新して最適解を見つけない。

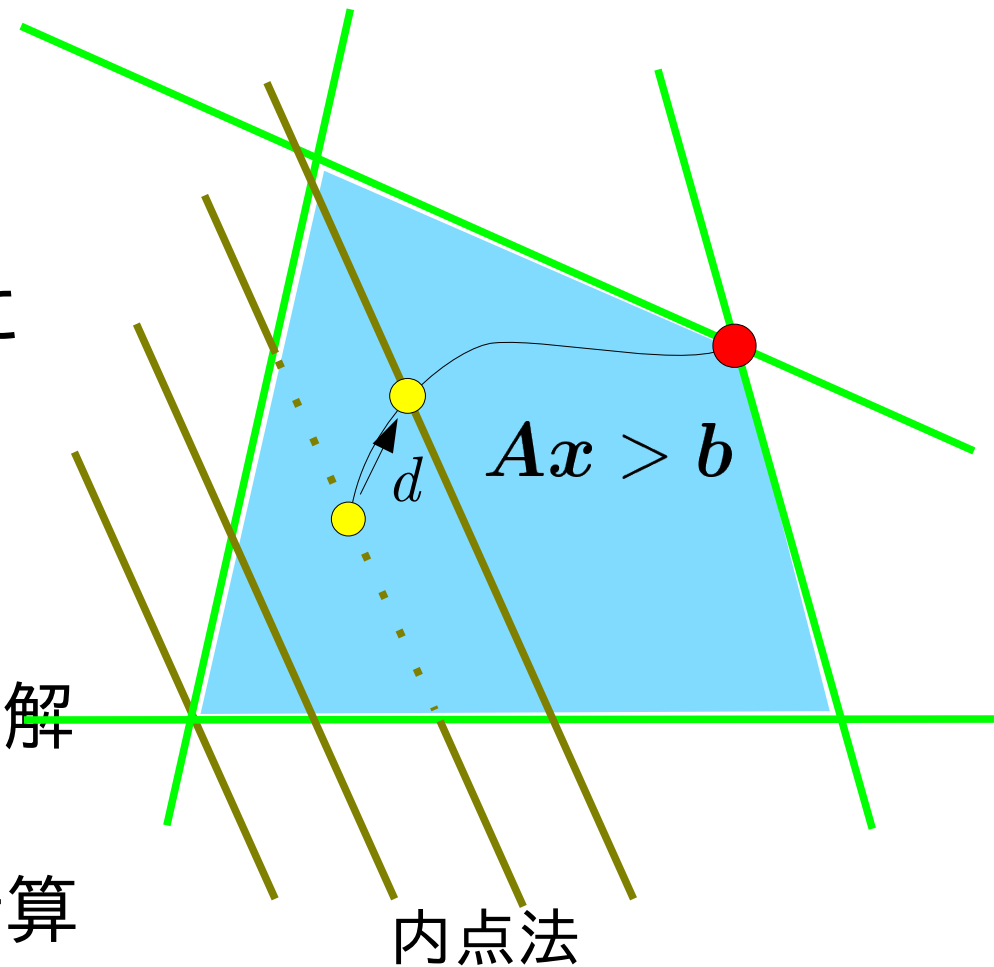
$x_{k+1} = x_k + d$ (ただし $c^T x_k > c^T x_{k+1}$)

さらに、

$Ax_{k+1} > b$ で、かつ最終的に最適解に収束するように d を定める。

できれば反復回数は少なく、計算も簡単な方が好い。

どうやって?



内点法の準備

- 自己双対型線形計画問題

歪対称行列 A ($A^T = -A$) を用いて次式で表される線形計画問題を自己双対型と呼ぶ。

$$\text{minimize } z = c^T x \quad \text{subject to } Ax \geq -c, x \geq 0$$

自己双対型の主問題に対する双対問題を考える。

$$\text{maximize } w = (-c)^T y \quad \text{subject to } -Ay \leq c, y \geq 0$$

符号を考えて最小化問題に置き換えると、主問題に一致する。

$$\text{minimize } w = c^T y \quad \text{subject to } Ay \geq -c, y \geq 0$$

主問題が自身の双対問題でもあることをもって「自己双対型」と呼んでいる。

内点法の準備

- 自己双対型線形計画問題への変換

任意の線形計画問題を自己双対型に変換することができる。

例: 次の最小化問題を考える。

$$\text{minimize } z=c^T x \quad \text{subject to } Ax \geq b, x \geq 0$$

その双対問題は次の通り、

$$\text{maximize } w=b^T y \quad \text{subject to } A^T y \leq c, y \geq 0$$

ここに現われた行列を使って次の問題を考える。

$$\begin{aligned} &\text{minimize } z=0^T x+0^T y+0^T \tau \quad (x, y, \tau \geq 0) \\ &\text{subject to } \begin{bmatrix} O & A & -b \\ -A^T & O & c \\ b^T & -c^T & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} y \\ x \\ \tau \end{bmatrix} \geq \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

ただし O , O はそれぞれ適切な行数・列数の零行列。

内点法の準備

- A, b, c を用いた次の問題は自己双対型である。

$$\begin{array}{l} \text{minimize} \quad z=0^T x+0^T y +0^T \lambda \\ \text{subject to} \quad \begin{bmatrix} O & A & -b \\ -A^T & O & c \\ b^T & -c^T & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} y \\ x \\ \tau \end{bmatrix} \geq \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} \end{array}$$

- 実際に、その双対問題を考えれば、

$$\begin{array}{l} \text{maximize} \quad w=0^T x'+0^T y'+0^T \lambda' \quad (x',y',\tau' \geq 0) \\ \text{subject to} \quad \begin{bmatrix} O & A & -b \\ -A^T & O & c \\ b^T & -c^T & 0 \end{bmatrix}^T \begin{bmatrix} y' \\ x' \\ \tau' \end{bmatrix} \leq - \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} \end{array}$$

$$\iff \begin{bmatrix} O & A & -b \\ -A^T & O & c \\ b^T & -c^T & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} y' \\ x' \\ \tau' \end{bmatrix} \geq \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix}$$

内点法の準備

- 3つの問題を比較して、

$$\text{minimize } z=c^T x \quad \text{subject to } Ax \geq b, x \geq 0$$

$$\text{maximize } w=b^T y \quad \text{subject to } A^T y \leq c, y \geq 0$$

$$\begin{aligned} &\text{minimize } z=0^T x+0^T y+0^T \tau \quad (x,y,\tau \geq 0) \\ &\text{subject to } \begin{bmatrix} O & A & -b \\ -A^T & O & c \\ b^T & -c^T & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} y \\ x \\ \tau \end{bmatrix} \geq \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

1番目の問題の最適解を x^* 、その双対問題の最適解を y^* としたとき、 $x=x^*, y=y^*, \tau=1$ が自己双対型問題の実行可能解であることは明らか、目的関数が増加しないので最適解でもある。

逆に x,y,τ が自己双対型問題の実行可能解であれば、最下行の不等式より $b^T y - c^T x = \rho \geq 0$ とおけるので τ をかけ、次式を得る

$$\tau \rho = \tau(b^T y - c^T x) = (\tau b)^T y - (\tau c)^T x \leq (Ax)^T y - (A^T y)^T x = 0$$